



監督＝ボン・ジュノ／出演＝ソン・ガンホ／キム・サンギョン／キム・レハ／ソン・ジェホ／ピョン・ヒボン／コ・ソヒ／チヨン・ミソン／パク・ノシク／リュ・テホ／パク・ヘイル（シネカノン配給／2003年韓国映画／130分）

韓国で1986年から91年にかけて現実^{ファン}に起こった「華城連続殺人事件」を題材として、捜査に執念を燃やす対照的な個性の2人の刑事と、次々に容疑者とされていく男たちの姿をリアルかつ骨太に描いた見事な作品。何よりも、登場人物たちのキャラクターが鮮明に示されているため、争点が明確になるのがいい。そのため、複雑な「謎解きゲーム(?)」も、緊張感を途切れさせることなく引きずり込まれていく。10人という被害者の悲惨さを思えば、早く犯人を検挙して欲しいと思うのは当然だが、弁護士としての目で見ると、あらゆるところに「違法捜査」が目につくのは気がかり……。しかしこの際それは横において、この作品の完成度を褒めておこう。

🎬 はじまりは1986年、若い女性の変死体の発見から

1986年10月、ソウルから約50km南にある華城^{ファン}という名の農村で、コンクリートの蓋で覆われた用水路の中に、手足を縛られて拘束されたうえ、頭部にはガードルを被せられた若い女性の変死体が発見された。既に腐敗していたが、鑑定の結果、強姦されていることが判明。

さらにその数日後、第1事件現場の近くで同様の手口による連続強姦殺人事件が発生した。

これが、その後1991年までの6年間に10人の女性が殺害される事件のはじまりだった。

現地捜査本部の捜査は？

現地に設置された特別捜査本部では、捜査課長（ピョン・ヒボン）を中心に、地元のパク・トゥマン刑事（ソン・ガンホ）とチョ・ヨング刑事（キム・レハ）が必死にこの事件を捜査。「俺は人を見る目がある」と自信たっぷりのパク刑事は「叩き上げタイプ」で、「捜査は足でするもの」と信じ込んでいる。また相棒のチョ刑事はかなり強暴型（?）。殴り、蹴りによる「自白獲得」は当然のこと（?）と思っている様子で、これはちょっと恐い……。

そんな中、パク刑事の恋人ソリョン（チョン・ミソン）の情報等から、パク刑事は、被害者につきまどっていた焼肉屋の息子ペク・クァンホ（パク・ノシク）を逮捕し、これを強引に尋問。弁護士の私の目から見れば、これはいくらなんでも無茶な取り調べだが……。

マスコミ公開（?）の現場検証

今日は、容疑者のクァンホの立ち会いの下で、「被害者役」の刑事も参加させての「現場検証」。なぜかここには、たくさんのマスコミが来ていたが、これは、捜査側に筋書きどおりクァンホに「実演」させる自信があったため、得点を稼ごうとして、あらかじめマスコミに情報を流していたため。しかし途中からはクァンホの父親も割り込み、「俺の息子は犯人じゃない！」とふれ回る始末。そのため結果は悲惨なものに。

クァンホは「筋書き」どおりの「指示説明」をしないうえ、父親の出現もあって、マスコミ注視の中で現場検証は大混乱……。その結果、クァンホは証拠不十分で釈放せざるをえなくなり、事件は迷宮入りの様相を呈してきた。挙げ句の果てに、捜査課長も解任だ。

インテリ刑事の登場

こんな現地捜査本部に、ソウル市警から派遣されてきたのがソ・テユン刑事（キム・サンギョン）。彼は4年生大学卒で英語もオーケーのインテリ刑事。捜査本部が容疑者とみていたクァンホは犯人じゃない！ と断言し、現場検証は恥を

かくだけだと進言。そんなソ刑事は、当然叩き上げのパク刑事とは最初から意見が合わず、いつもケンカ。そして、「人を見る目」で容疑者を絞り込み、自白偏重思考の強いパク刑事に対し、「書類は嘘をつかない」と信じるソ刑事は、捜査資料を丹念に読み込み、2つの事件の共通点を必死に探していた。

新任捜査課長の登場

このソ刑事の合理的推論法を新任の捜査課長（ソン・ジェホ）も採用。しかし当面の共通点は、被害者が2人とも独身の美女であったこと、①雨の日の犯行であったこと、②被害者は赤い服を着ていたこと、だけ。しかしそこに強力な助っ人が……。

それは捜査本部に所属する唯一の女性警官ギオク（コ・ソヒ）。彼女は新たに発見された3人目の被害者を含めて、事件のあった日には、必ずラジオのFM放送で『憂鬱な手紙』がリクエストされ、流されていたというのだ。これは偶然か、それとも、犯人にたどり着くための重要な共通項なのか……？

新任の捜査課長とソ刑事はこの線に沿って科学的な裏付け捜査に奔走しようとしたが……。

混乱する捜査方法

ソ刑事の「推論」が気に入らないパク刑事。だからこちらも「オレ流」で必死の捜査。その方法の第1は、現場に犯人の陰毛がなかったことから、「犯人は無毛症の男」と推論し、身銭を切った銭湯通い。第2は、これも自ら高い費用を支払って、よく当たるといふ占い師のもとへ。何ともご苦労なこと……？

苛立ち、消耗していくパク刑事を支えるのは、その恋人のソリョンだが、ラスト近くでは遂に、「刑事みたいな仕事は早く辞めたら」とアドバイスせざるをえなくなったほど刑事という職業は大変……？ この事件は混迷し、今でも犯人は拳がっていないとのこと。

そう、この映画が描くこの事件とこの犯人捜しのドラマは、実はつくりモノではなく、韓国で現実^{ファン}に発生した、連続猟奇強姦殺人事件（華城連続殺人事件）を題材としたものなのだ。

第2の容疑者は？

第2の容疑者は、夜中1人で犯行現場にきて、懐から女性の下着を取り出して地面に置き、これを見ながらマスターベーションをするファソン村に住む中年のおじさんのチョ・ビョンスン（リュ・テホ）。占い師の予言によって現場に潜んでいたパク刑事とチョ刑事。そして独自の推論で現場に来ていたソ刑事は、一斉にこの男に飛びかかり、逃げていく男を取り押さえたが……？

第3の容疑者は

第3の容疑者は、ソ刑事の独自の捜査によるもの。女子学生からの情報によって、ソ刑事は「自分も被害にあったが、犯人の顔を見ないように、何をされても目をつむっていたから助かった」という女性と出会うことに。そしてその女性が1つだけ覚えているのは、「私の口をふさいだ犯人の手が女の手のように柔らかかった」ということ。だがこれは重要な情報。この情報により、第2の容疑者の手を見ると……。「こいつは犯人じゃない！」と断言するソ刑事に対しパク刑事は怒り狂い、2人は大乱闘……。しかしそんな中、ラジオでは『憂鬱な手紙』が流れ始め、その上ちょうど雨が降り始めた。必ず今夜次の犯行が起こる……。そう確信したとおり、また新たな被害者が……。

FMラジオへの『憂鬱な手紙』のリクエストのハガキによって、そのリクエストした男が判明した。その男は工場に勤務するパク・ヒョンギョ（パク・ヘイル）。ヒョンギョは、昨年9月からこの工場です務仕事を開始した。そしてそれ以降連続殺人事件が発生。そのうえ、ヒョンギョの手は女の手のように柔らかかった……。

第1容疑者クアンホは実は目撃者？

犯人はヒョンギョに違いないと確信するパク刑事とソ刑事だが、証拠がなくては話にならない。ここで思い出したのが、現場検証におけるクアンホの指示説明。犯人の供述としてはたしかに中途半端だったが、目撃したことを語っているとすればつじつまが合う。

そのことに気付いたパク刑事とソ刑事は直ちにクエンホのもとへ。しかしパク刑事からひどい目にあわされていたクエンホはおびえて逃げていく。これをなだめ、「お前は女が殺されるところを見たんだな？」と質問すると、クエンホはこれにうなずいた。しかし「犯人の顔は？」と迫って写真を示すと、混乱したクエンホから、はっきりとした回答はない。

苛立つパク刑事とソ刑事は強引に回答を求めたため、クエンホは再び逃げ出し、その拳げ句に、列車にひかれて死亡してしまうことに……。

ヒョンギュの取り調べは？

ヒョンギュが犯人であることはまちがいない。そう確信したパク刑事とソ刑事は、その尋問を進めていくが、それをブチ壊したのが強暴派のチョ刑事。被疑者へのこれ以上の暴力や拷問は絶対にダメと捜査課長から言われていたにもかかわらず、ノラリクラーリとしたヒョンギュの回答に苛立ったチョ刑事は、ヒョンギュに対して飛び蹴りを……。

これでは、まともな取り調べができるはずがないのは当然。

決め手は精液のDNA鑑定のはずだったが……

決め手はやはり科学捜査。現場に残された被害者の服に付着していた精液を採取することに成功したため、これとヒョンギュの精液が一致すれば、ヒョンギュを犯人と断定することは可能、というわけだ。

しかし残念ながら韓国にはDNA鑑定をする能力や施設がないため、アメリカに依頼しなければならない。そのため、鑑定結果が出るまで一時ヒョンギュを釈放し、その監視を続けることに。

なお弁護士としてひと言つけ加えれば、ヒョンギュの精液の提供（強制的採取？）は、実は法的手段としてはきわめて難しいもの。よほどの容疑が固まらなければ、被疑者が拒否した場合、強制的にその精液を採取するなどということは不可能に近いもの。しかし1980～90年代の韓国の犯罪捜査では、暴力や拷問を含めてそれぐらいのことは容易だったのかもしれないが……？

期待に胸をふくらませて待った鑑定結果は……？

さらに増えた被害者

ヒョンギュへの24時間監視・尾行は容易なことではない。ちょっと目をはなした際に、ヒョンギュは部屋を抜け出し、バスに乗ってしまった。そしてまずいことに、ここで雨が降り始めた。その結果……？ 今度の被害者は、ソ刑事に貴重な情報を提供してくれた女子学生。さすがに冷静なソ刑事も怒りに震えた。そしてそれを決定的にしたのが、DNA鑑定の結果……。ソ刑事は自らの手でヒョンギュを殴り倒し、挙げ句の果てに拳銃まで抜いたが……？

弁護士としての目で見ると……

前述のように、この映画は、韓国で1986年から1991年の間に実際に発生した10件の連続強姦殺人を題材としたもの。そして犯人検挙に執念を燃やす2人の刑事と容疑者とされた3人の男の姿を中心に描いた骨太の人間ドラマ。その意味では大いに見ごたえのある映画。

しかし、弁護士としての目で憲法や刑事訴訟法に定められた適正手続や被疑者の権利の保護の視点からいうと、この映画の捜査方法には大いに問題がある。まず、強暴派(?)のチョ刑事は論外。また、パク刑事の自白獲得手段や現場検証での指示説明の「演技指導」も無茶苦茶。ソ刑事はさすがインテリだけに合法的だが、第3の容疑者について、DNA鑑定が思惑どおりの結果が出なかったときの暴力沙汰は、他の刑事と同様に無茶苦茶。

なお、DNA鑑定のための第3の容疑者ヒョンギュからの精液提供も、本来はほとんど不可能に近いはず。したがって、このような「違法」な捜査によって証拠を固めて起訴したとしても、裁判所は違法収集証拠によって有罪を認定することはできないとして、無罪になる可能性が高いはずだ。もっとも、これは日本の憲法や刑事訴訟法を前提とした場合の話であり、韓国の刑事訴訟法制度のもとではどうなるのかは知らないが……。

何とも虚しい結末だが……

警察の捜査能力ってこんなもの……？ そう思わざるをえないし、大きな無力

感を覚えざるをえないのが、この映画を観た後の実感。もちろんこの「^{ファン}華城連続殺人事件」の犯人は未だ検挙されていない。

映画のラストは、刑事を辞めて今は実業家となっているパクが、犯行現場を通りかかった際、思い出(?)の用水路をのぞき込んでいるところ。これを不思議そうに見ていた女の子の質問に答えるパクだが、女の子から、同じようにそこをのぞき込んでいたおじさんがいたことを指摘されて思わず……?

骨太の映画の評価は？

この「^{ファン}華城連続殺人事件」を題材とした映画は、韓国では『シュリ』(99年)、『JSA』(00年)、さらには『マトリックス』シリーズ(99年、03年、03年)を超える560万人を動員し、2003年興行収入No.1を記録したとのこと。また、第40回大鐘賞「韓国のアカデミー賞」作品賞、監督賞、主演男優賞、照明賞の各賞を受賞した、とのこと。

現実に起こった連続強姦殺人事件をテーマとして映画を製作することはすごく難しいことだと思うが、刑事たちの執念と容疑者とされた男たちの苦悩ぶりがリアルに、かつ緊張感をもって描かれた本当に骨太の立派な作品。雑誌や新聞の評論をみても、絶賛する声がほとんどであることも十分うなずける。

またこの映画が韓国で大ヒットしたため、この「^{ファン}華城連続殺人事件」への関心が急速に高まり、特集が組まれたり、市民運動が起きているとのこと。「時効の壁」もあるが、多くの有力情報が提供され、犯人検挙となることを願わずにはいられない。もっとも弁護士としての目で見れば至るところに見られる「白白偏重」の「違法捜査」には目にあまるものがあり、それは大きな声で指摘したいところだが……。

それを横において一観客としては、上映期間のラスト直前のレイトショーでやっとこの映画を観ることができて大満足。

2004(平成16)年4月16日記